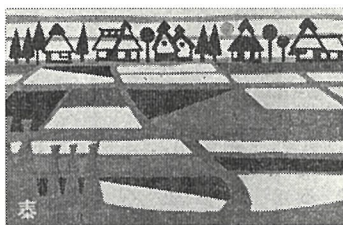


随 想

人 生 問 題

大 谷 実



れを生かしたのだと思います。私には心の内に深い直接な問題があつて解決を迫つてゐます」。

これは、倉田百三の処女作『歌わぬ人』の一節であるが、人間だれでも、一〇代の後半から二〇代の前半に、この『なくてはならぬものは只一つ』が何であるかに、深く懊悩するに違いない。しかし、青春時代の真摯な、純一無垢な問いと願望は、やがて『現実』という大きな波に飲み込まれ、「お互いに食つて飲み楽しもうではないか。どうせ短い一生なのだから」という現実主義にいたる。しかし「無思慮な『現実主義』は大部分、これによつて幸福になりうるといふ確信の結果ではなく、その他のあらゆる道に対する絶望の結果にすぎぬと解しても、おそらく間違いないであろう」(ヒルティ)。

わたくしも三〇代の最後に達して、同じような経験をしている。崇高な哲学は別として、人間と人間観の究極の目標は、人間としての幸福とは何かを希求することにあるのだらう。かくして、愛を経験し、徳を積み、名誉を重んじ、地位を得ようとす

る。しかし、それらは、うつろいやすい、つかの間の虚像であることに気づかぬものはいない。それらが幸福への道を閉ざすものであることを知りながら、なお捨て切れないのは、他に、これにすぐる道がないからなのであらう。「幸福は世にあるものだ、しかし、われわれはそれを知らない。いや知つてはいるが、それを尊ぶことを知らないのだ」(ゲーテ)。

われわれの人生は、飲み、食ひそれで死ぬというだけでなく、それ以外にもう少し善いものがあるはずである、という認識と、善なるもの、崇高なるものへの心の渴望、この自己の意思による自発的な願望に従属することこそ、現実主義からの脱皮のチャンスなのであらう。

青春時代のあくなき思索は、それが真剣なものであるかぎり、人生問題の真理を垣間見る機会を与えてくれる。そうして、この真理との出逢ひは、人間の内的生活と成長に深くかわりあいをもちながら、次第に、人生への確信へと発展し、やがて倫理的な世界、霊的世界、永遠の生命に対する信仰に到達するものであらう。そういう経

「私は文化を吸収するといふ欲望には飽いたのです。此の欲望は却つて私たちの真生命『なくてはならぬものは只一つなり』のその一つのものを握ろうとする精進を阻んでゐることを感じて来ました。耶穌でも釈迦でも一つのなくてはならぬものを握つてそ

過をとらない人生は、どこかに問題があるのではなからうか。(大学法学部教授・刑事法)

厄年

赤木雅吾

この春、私の郷里から奇妙な小包が届いた。さっそく開けて見ると、驚いたことに神社の「お守り」、「御神米」などさまざまな品が入っていた。それを見て、直感的に日ごろ無信仰な自分への有り難い忠告ないしは警告と考えた。しかし、よく見るとその「御神米」の袋に「厄災消除 寿命長久 祈」更に「願主」の欄には自分の氏名、年令まで記されてあった。そこでやっとその小包の意味と自分が四十二才(数え年)という「厄年」であることがわかった。

しかし人間は妙なもので日ごろ自分の年令はほとんど意識しないで、常に「若い」と信じこんで生活している。ところがこの

ような形で自分の年令を知らされると、まるで何か自分の墓石の前に立たされたかのように愕然とするものである。確かに、人間の平均寿命を一応七十才ぐらいとすれば、四十二才ということは人生のほぼ三分の二を終えたことになる。人生を梯子に例えるなら、今まではその一段一段を唯専らに上をのみ見ながら、無限の梯子段のごとく考えて登ってきた。ところが四十二段目ぐらになると、その梯子の残りの段数もそろそろわかり始める。上を見ては恐怖心におそわれ、下を見下ろしてその高さに慄然とし、上にも下にも動けない状態になる。

そのような意味から「四十才にして迷わず」という言葉が出たのであろうが、新島先生が三十才代にして同志社設立の偉業を果たされたことを考えると、凡人なりに「自分はいつい今まで何を成したのか」と自問して、「迷わず」どころか、大いに迷わざるを得なくなる。

しかし、世に偉人といわれ、宗祖と崇められた宗教家たちが果たして四十才にして迷わなかったのであろうか。詩聖ゲーテに

しろ、トルストイにしろ、親鸞にしろ偉人、天才であればあるほど、その迷いもまた大きかったはずである。ことに親鸞が、またトルストイが晩年いかに自己の凡能と闘い、迷い続けたかは誰しも知るところである。従って、これら偉人たちは「迷う」ことこそ、「生」の証であることを身をもって立証したのではなからうか。いわゆる「恍惚の人」には最早「迷い」は存在しないであらうし、その意味で「生」も存在しないであらう。

このように考えてみると、「厄年」にしろ、「四十才にして迷わず」という言葉にしろ、むしろその逆に考えた方がなんとなく真実味があり、人間的であるように思えてくる。だから「厄年」四十二才までの生を与えられたことをむしろ神に感謝すべきであり、「四十才にしてますます迷うべし」である。しかしその「厄年」も私にとってはそろそろ終わりに近づいてきているが、この調子では「厄年」を機会に、無信心で、なお「迷える子羊」である我が身は第二の「迷いの道」を更に迷い続けることになりそうである。(大学経済学部教授・英語)

ロンドンのパブ

西村 豁 通

ロンドンの街からパブがなくなりつつある、などといえは、そんな馬鹿なこと、と言つて、一笑に付されるかもしれない。だがしかし、昨年の旅行の途中に立ち寄ったロンドンの街頭から、私が期待していた形のパブはほとんどかげをひそめていた。

パブはパブリック・バーの略語である。粗末な机や椅子と、ダーツという投げ矢の施設があるだけで、プライベート・バーともいいサロンとも称するすこし気のきいた酒場と入口だけを異にし、仕切り一つをへだてて同じ店の中で隣り合わせになっていた。九年前の時には、こうした酒場がいたるところにあり、あまりうまくはないが、品質の種類が多いイギリスの黒ビールをよく飲んだ。

こうしたパブがロンドンから姿を消しつつある。もちろん酒場がなくなつたわけではない。だがそれはサロンという名がつけられており、パブと書かれてあつてもサロンと同居のものではなく、仕切りをはずし全体としてサロン化した姿がそこにあつた。探しあぐねて街角のお巡りさんにきいてみても、それがパブだといひ、私の念頭にあるパブの説明をしたら、それは悪い人たちの集まる場所だから行かない方がよいとも忠告してくれた。

たしかに、やつと、一軒だけさがし出し、辿りついた私の「パブ」には、入墨をした陰気な感じのいかにも貧しげな老労働者風の一団があつた。しかし百何十年も以前からパブは貧しい労働者のささやかな憩いの場であり、日本風にいえば居酒屋という語感がびつたりとした場所であつた。人々はここで人生の悩みを酒にまぎらし、生活の苦しさを語りあいながら、労働組合の相談をし、また酒場の亭主を会計係として友愛組合を運営したという。こうしたパブがなくなろうとしているのである。

パブとサロンとをへだてる仕切りが象徴

しているように、身分意識の強いイギリスでは、ホワイト・カラーとブルー・カラーはかつては席を共にしないで酒をのんだ。クイーンをいただき、イートンからケンブリッジやオックスフォードへのエリート・コースが永遠に支配をつづけるかにみえたイギリスにも時代の波がおしよせているのであろうか。そういえば以前にはしきりとみかけた山高帽の紳士も、今はほとんどみられなくなつていた。

日本でも近年グレイ・カラー化現象が語られるようになった。労働の態様においても、したがつてその意識においても、事務労働者と現場労働者の差異が、つまりホワイト・カラーとブルー・カラーの区別がなくなりつつあるというのである。パブとサロンの障壁の撤去は、イギリスでも両者の社会的地位の同一化とその交流がはじまっていることを物語るものであろう。しかも新労使関係法下のイギリス労働者のはげしい抵抗は、これを労働者階級の新中産階級化とする一面的な見方に対し、事実をもって反対の答えを用意しているようである。

(大学経済学部教授・社会政策)

縁うすきもの

正木 亮二

祖先とか両親兄弟とか、ましてその他の親戚縁者とか、そういう血縁との繋がりが極端に少ない私の半生である。京大阪にはずいぶん長い系図を持った家はかなり多い。そのような家族に会うと、間違いなく劣等感が生じ、いわれない淋しさを味わう。彼らは幸福で私は不幸だと思う。それは理屈を超えた感情だ。

この夏、私はふと思いついて奥能登に旅した。西海岸の富来町から海岸沿いに少し上ると、「風無（かざなし）」という地がある。バスの停留所にはつきり風無と書いてあった。日本海に面した斜面に半農半漁の家の詰まった村である。冬はさぞ風雨風雪が厳しいだろうに、風が無いという名はちょっと逆説的で浪漫的であると思う。こ

こが私の先祖の地なのだ。生まれて四十九年、初めてこの地に足を踏み入れた。バス停に老人がいたので、この辺で最も古くて大きい寺はどこかと尋ねると、寺はたくさんある、一番古いかどうかは知らぬが大きいのはそこだと、海側の一角を示す。私は降りて行った。間もなく年代を経た大きな寺にぶつかった。海が穏やかに眠っていて、蟬が鳴いている。横手の墓所に案内も乞わず勝手に入って行った。大小の墓石が乱雑に並んでいた。何しろ寺名も知らぬのだから、十に一つという気持ちで墓碑を見て行くうち、突然私の眼を鋭く射てくるものがあつた。半ば倒れかかった古い墓石に、黒ぐろと『正木善三郎』という文字が彫られている。祖父は善次郎といった。もと満州の大連でその一生のほとんど全部を過ごし、敗戦であらゆる財産を没収されリュックひとつで引きあげてきた。誤まてる国策の犠牲者のひとりだ。二十年前九十いくつかで亡くなった。その時も私は法要に参列していない。ともかく善三郎というのだから祖父の何かに当たるのだろう。見も聞きもしない血縁の一部分がこんな北陸の辺

鄙な、海を見おろす寺の一隅にひっそり傾いて眠っているとは。額の汗がいつか海風に吸われていくのを覚えながら、しばらく立ちすくんでいた。

あとで住職に聞くと、そこから少し離れたところに新しい墓があつて、善三郎の墓に収められているお骨もみなそちらに移されたという。供花をし経をあげてもらったが、はじめに書いた血縁の薄さが救われたとも思えない。この世の新しい墓はだれかが建てなければ事実のものとならない。そのだけかによつて、墓に入る者の順序や権利やらが決定されてくる。まことに煩雑なものだ。私の父も戦後はすっかり呆けてしまつて、今では今年一杯持つか否かの生命である。父は自分はこの墓にはいるものと疑ったことがないが、事情でそうもいかぬらしい。鎌倉辺りに墓地を探したら、というのが横浜に住んでいる弟の意見である。それこれ思うと『風無』にこだわる要もない。ただし、死んでも父自身は「風無」に埋葬されたものと信じこんでしまうだろうと思うと、哀れはつのである。

(香里中高教諭・国語)

随 想

小 菅 俊 吉

昔、道は人の歩くためのものだった。が現在、道は車に占領され、人は道の端の方を遠慮がちに歩いている。おかしいことだ。特に京都の街では、昔ながらの狭い道に自動車がいっぱいあふれている。

昔、京都の街は山紫水明であつたらしいが、私を知る限りでは、川は汚なく、山の陵線がはっきり見える日はわずかしかなかった。私の家は東寺の近くにあるが、空気の汚れに弱い杉等は枯れてしまうようだ。このまま放置しておけば、京都の街、大きく見れば地球はどうなつてゆくかと不安になる。表面的には公害のない電車をなくし、どんどんバスを増やしてゆく。こんなに矛盾したことはない。

公害のない文明はないのだろうか。我々

の生活は確かに便利になった。しかし、それと同時にすべての生物の生存にとって不利益な条件も同時に増しているだろう。人間とは奇妙な動物だと思う。他の生物とはちがひ、自分を含めた全生物に不利益な環境をつくりだし、やがて亡びてゆくのだろうか。

私が同志社高校に来て生物を勉強するようになって八年になる。それまでは、そんなことは考えもしなかったし、また当時はそんなに問題にもなっていなかった。我々は、後の世の生物のためにも何とかこのあたりで公害を少しでも防止せねばならないだろう。

先日の連休にも亀岡に帰った。休日に京都にいたって車の洪水を見るだけだからである。それよりも自然の野原の方が好きである。まだ亀岡近郊には、自然が多少残っている。特に園部の、るり溪はいいだろうと思つて行つてみたが、ここも人と車の行列だった。しかし、帰り道にはまだ、さぎ草があつたり、うめばち草があつたりしてなつかしい気がした。ところがその山の中に分譲地がある光景には、おどろかされた。

まだ道もない山を切り開き、分譲しているのである。しかも大半が売れていた。このような無秩序な開発、車の増加、農薬の使用すぎ等、簡単に言えば、国の誤まつた政策が、今日の日本の自然の破かひを招いたことはまちがひのない事実だろう。ということは自然の破かひの責任は我々自身なのだということに気が付く。私はこのような事実を生徒たちに教えておかねばいけないと思う。我々が後の世の人々に残しておくべきものは、豊かな文明でもなければ、コンクリートのジャングルでもない。それは自然であり、公害のない地球である。

何を書いたのか、趣旨がよくまとまらないが、少しでも公害のない社会につくせたら、私人間として地球上に何十年か存在する意義があると言えるのだから。

(高等学校教諭・理科)